

平成22年6月7日現在

研究種目：基盤研究（A）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18251016
 研究課題名（和文） 南アジア地域における消費社会化と都市空間の変容に関する文化人類学的研究
 研究課題名（英文） A Cultural Anthropological Study of the Commercialization and Transformation of Urban Space in South Asia
 研究代表者
 三尾 稔 (MIO MINORU)
 国立民族学博物館・研究戦略センター・准教授
 研究者番号：50242029

研究成果の概要（和文）：文化人類学とその関連分野の研究者が、南アジアのさまざまな規模の20都市でのべ50回以上のフィールド調査を実施し、91本の論文や27回の学会発表などでその結果を発表した。これまで不足していた南アジアの都市の民族誌の積み重ねは、将来の研究の推進の基礎となる。また、①南アジアの伝統的都市の形成には聖性やそれと密接に関係する王権が非常に重要な機能を果たしてきたこと、②伝統的な都市の性格が消費社会化のなかで消滅し、都市社会の伝統的な社会関係が変質していること、③これに対処するネイバーフッドの再構築のなかで再び宗教が大きな役割を果たしていること、などが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：Scholars of the cultural anthropology and its related field of study carried out field research a total of more than 50 times in 20 cities of various scales in South Asia and published 91 articles and read 27 papers in various academic conferences based on their researches. The accumulation of ethnographical studies of cities of South Asia which had been rarely conducted is itself a remarkable contribution for the development of the study of cities of this area. Through these studies the following three points became clear. Firstly, the sacredness and the kingship have played traditionally a very important role for the formation of south Asian cities. Secondly, the traditional features of cities disappeared through the penetration of consuming culture, and the traditional social relationships in the cities have been transformed. And finally, religious practices are playing an important role again in the reconstruction of neighbourhood against these social trends.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	8,200,000	2,460,000	10,660,000
2007年度	7,800,000	2,340,000	10,140,000
2008年度	8,200,000	2,460,000	10,660,000
2009年度	2,200,000	660,000	2,860,000
年度			
総計	26,400,000	7,920,000	34,320,000

研究分野：文化人類学・南アジア研究

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：(1)文化人類学、(2)南アジア研究、(3)都市研究

1. 研究開始当初の背景

1990年代から持続する経済発展の結果、インドでは新中間層と呼ばれる階層の人口が急成長した。この層はムンバイ等のメガ・シティから、2000年代には地方都市にまで、幅広くプレゼンスを高めたが、その結果消費文化がインドの隅々にまで浸透する一方、旧市街をも巻き込んだ宅地開発の進行等により各地の都市景観も急速に変貌を遂げた。

都市の急速な変容は、新しい社会関係や共同体の出現につながる可能性を持つ。一方、それはアイデンティティの不安や社会秩序の混乱にもつながりうる。90年代以降頻発した都市を舞台とする異なる宗教信者間の暴力的紛争はその端的な現れであった。また急速な発展は、住環境の悪化やスラムの拡張、貧富の差の拡大など、世界の都市問題と共通する問題をはらんだものであった。

しかし、インドの都市が大きな可能性と問題をともにはらむものである一方、その人類学的研究は、農村研究やカースト研究に比べて大きく立ち遅れ、都市社会の伝統的な基層構造も明確にはなっていなかった。また都市形成の契機、都市の空間構成の特徴、インド的な都市文化の特徴、都市が地域社会の中で担ってきた機能等々、都市の過去を捉え、将来を考えるための基本的な事柄についても、断片的な研究はあっても総合的な研究はほとんど行われていない状況にあった。

2. 研究の目的

インドの都市の変化や将来的な課題について考えるためにも、インドの都市の基層構造を文化人類学にとどまらず、他分野の専門的研究者と協力して学際的な観点から解明することが必要である。またその際インドの歴史的な位置づけからして、南アジア全体に視野を広げ、都市の特性を幅広く理解する必要がある。今回のプロジェクトは、平成17年度まで実施された科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））「インド北・西部における都市型祭礼の変容に関する文化人類学的研究」

（研究代表者 三尾 稔）の研究成果を基礎とし、南アジアの都市研究の現状を踏まえながら、都市の基層構造を解明しつつ、その変容の方向性を測定する、という2つの目的のもとに開始された。

都市の基層構造とは、都市における社会生活を基礎づける空間構造であるが、これを単なる物理的構造という観点からではなく、都市に生きる人びとの意味空間（街区における社会関係や人びとの経験が聖俗その他の施設を通じてどのように枠づけられ、意味を与えられているのか。また逆に社会関係は都市空間にいかん表現されるのかなど）の構成として文化人類学的な観点から捉えることを

目標とした。また都市のミクロな構造だけではなく、ある都市の全体構造やその都市がある地域において果たす機能や意味といった側面にも十分留意しながら、南アジアの都市の基本的な性格を明らかにしようとした。

変容の方向性の測定においては、上記のような基層構造や都市の基本的性格が、グローバルな経済発展のなかでどのような影響を受け変容しているのか、またその変容に対して都市を生きる人びとがどのように対応し、自分たちの生を意味のあるものとして生きようとしているのかと言う点に特に留意して研究を進めることを目標とした。

3. 研究の方法

文化人類学は、その方法として参与観察や住民へのインタビューを中心としたフィールドワークを特色としてきた。人類学的な観点から上記の目的を達するためには、多数の研究者をできるだけ多くの南アジアの諸都市に送り、都市を構成する街区に住み込みそこに住む人々の社会関係や文化的に構築されてきた都市空間の捉え方に関して分析を進める必要がある。このため、本プロジェクトでは、研究初年度から3年間にわたり研究代表、研究分担者、連携研究者、研究協力者がのべ約50回にわたって現地調査を実施した（最終年度は研究取りまとめのための研究会と報告書作成にあてており、補充的なものを除き長期現地調査は実施していない）。

調査のために訪れた都市は、インドのデリー、チャンディーガル、アジメール、ジャイプル、ウダイプル、アフマダーバード、ブージ、ムンバイ、プネー、バラナシー、コルカタ、バンガロール、マイソール、チェンナイ；パキスタンのラーホール；バングラデシュのダッカ、チッタゴン；ネパールのカトマンドゥ；スリランカのコロンボ、キャンディなどであり、南アジアの主要都市をほぼ網羅している。また、インドのバラナシーにおいては、人類学者と建築学者が共同的な調査も実施し、複眼的な視点から同市のミクロな基層構造の解明にあたった。

その一方、本プロジェクトは、ほぼ同時に開始した筆者を代表とする国立民族学博物館共同研究『南アジアにおける都市の人類学的研究』と密接に連動させて、総合的な視野から南アジアの都市の基層と変容に迫ることとした。即ち、本プロジェクトの参加者は全て上記共同研究のメンバーとして迎え、個々の調査研究の成果を研究会での討論を通じて全体で共有できるようにした。また、本プロジェクト自体にも人文地理学や歴史学の専門的研究者を加えたが、共同研究プロジェクトにはさらに考古学、建築学などの専門研究者にも参加してもらい、文化人類学的

視点だけでは明らかにしえない、都市のより広域的な広がりや機能、その発展過程の総合的な把握につとめた。

4. 研究成果

次項に示すとおり、4年間の研究を通じて本プロジェクトのメンバーは個々に総計で91本の論文を学術誌等に公表し、27の学会発表を行っている。また4年間の総合的な成果報告書を冊子体で出版したほか、単著や共著で総計5冊の図書を出版している。さらにインドの都市の変容がインドのみならずグローバルな社会や文化変容にもたらす意義に関して、研究代表と研究分担者が共同で学術講演を行い、本プロジェクトから得られた知見を広く一般社会に対して公開した。

また、平成22年度から本格始動した人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」のためのスタートアップという位置づけのもとに行われた、同事業のための国内研究集会においても、研究代表と研究分担者は本プロジェクトから得られた知見に基づく研究発表を行い（次項「学会発表」の三尾、杉本）、インド・南アジアを対象とした地域研究の新しい展開において重要な視点を示すものとして注目を集めた。

人類学者を中心に、様々な学問分野の研究者がこれまでほとんど研究対象とされて来なかったインドを含む南アジアの都市を調査フィールドとし、南アジアの様々な都市に関する具体的な民族誌を厚みを持って積み上げたことは、人類学的手法に基づく南アジアの都市研究の基礎を固める上で、それ自体大きな成果と言える。

特に、このような「都市誌」の積み重ねによって、エリート層からいわゆるサルタンに至るまでの、都市を生きる人びと自体の都市観やそれを形成するに至る経験を実証的に明らかにできた（特に次項の「雑誌論文」の③、④など）。このような手法が、都市の現在を把握する上で有効であることを示せたことは、インド、南アジアの今後の都市研究の展開に寄与するものである。

プロジェクト参加者個々の研究成果は多岐に渡るが、全体として得られた知見は大きく3点にまとめることができる。

第1点は、南アジアの都市性や都市の基層構造の特性である。南アジアの農村は均質な人々が集住する共同体ではなく、カーストによって差別化された人々が住む空間であった。また小規模ながら市場的機能を備えた農村も見られた。住民構成のヘテロ性や市場機能などは南アジアの都市性の指標とはなりえない。本プロジェクトの研究の集積は、むしろ、聖性やそれと密接に関わる権力性こそが南アジアの都市性や都市の基本構造を形

作る重要なファクターであることを明らかにした。

それは、都市を形成する重要な契機であり（次項の「雑誌論文」の⑤、「学会発表」の⑥など）、またある一定の領域内における都市の機能や意味づけにおいても（次項「雑誌論文」の⑥）明らかに見て取れる。

また都市の細部の街区の意味的空間、すなわち住民の都市経験の基層、の形成においても決定的に重要な役割を果たしている（次項「雑誌論文」の⑧）。

さらに、聖性と権力が都市性や都市の基層構造に決定的に重要であることは、ヒンドゥー的な都市においても、イスラーム的な都市においても変わらない（次項「学会発表」の⑤）。但し、イスラーム的都市とヒンドゥー的都市の間では、聖性と権力との関係のあり方そのものが違うことから、街区の構成や景観には違いが生じてくる。

同時に、南アジアやインド内部における都市の街区の構成や都市内部の社会関係のあり方の違いは、都市ごとに異なる聖性と権力の関係の態様や、都市がどのような時期にどの程度イスラーム的（あるいはヒンドゥー的）な都市形成モデルの影響を受けたのかによって生じてくることから、都市誌の比較からは示唆される。

全体的な知見の第2点は、上記のような南アジアの伝統的な都市性や基層構造の変化の方向性に関わる。基本的に、それらは現代において崩壊し、地域ごとの特性を失って全南アジア（あるいは少なくとも全インド）的に均質な社会空間に変容しようとしていることが、本プロジェクトの調査を通じて明らかとなった。それを駆動する要因は、都市の郊外に典型的に見られる均質で計画的な空間を造営しようとする哲学（計画都市の思想は、本プロジェクトでは次項「雑誌論文」⑦が究明している）であり、このような空間に宿る消費文化のハビトゥスが都市のすみずみを覆うに至らせたグローバルな経済発展のプロセスである。この結果、伝統的な都市の旧市街も、意味空間の構成が「郊外化」するに至っている（次項「雑誌論文」の⑧）。

全体的な知見の第3点は、このような状況に対する都市住民の対応の諸相である。住民はグローバル化やそれがもたらす大きな社会変容の単なる受動的な受け手ではなく、これと交渉しながら自らの主体性を確保して生き抜いている（次項の「学会発表」④）。

また、都市の基層構造の「郊外化」が全面化する中で失われてしまうネイバーフッドの再構築が様々な形で展開しつつあることも今回のプロジェクトから明らかとなった。その手がかりとなるのは、そもそも南アジアの都市性の母体となってきた聖性を形成する宗教的な実践である（次項の「雑誌論文」

の⑧、⑨、⑩)。ネイバーフッドの関係性の希薄化に対処しようとする、宗教実践を介した住民運動の活発化はまた、宗教的なナショナリズムやこれに基づく暴力紛争の基礎条件ともなりうることも、本プロジェクトの研究を通じて指摘された(次項の〔雑誌論文〕⑪参照)。

これらの知見は、平成22年7月に国立民族学博物館で開催が予定され、プロジェクト参加者のほぼ全てが発表する国際シンポジウム‘The City in South Asia’において国際的に発信し、このシンポジウムに参加する南アジアや英米の研究者とのディスカッションを通じて、より一層深化させる計画である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計91件)

- ① Izumi, Morimoto. 2010, “The Changes in Cultural Practices and Identities of a Nepali Musician Caste: the Gandharbas from Wandering Bards to Travelling Musicians.” 査読有 *Studies in Nepali History and Society* 13(2), 印刷中
- ② 中谷哲弥. 2010, 「新興国における中間層の拡大と観光—インドにおける国内観光の動向を中心として—」査読有『地域創造学研究(奈良県立大学研究季報)』20(3): 127-155
- ③ 井坂理穂. 2010, 「インドにおける州再編と都市の変容—ボンベイ市の帰属をめぐる対立」査読無、三尾稔編『南アジア地域における消費社会化と都市空間の変容に関する文化人類学的研究(科学研究費補助金〔基盤研究(A)〕研究成果報告書)』(国立民族学博物館) pp. 99-125
- ④ 高田峰夫. 2010, 「都市と人生—チッタゴンで、下層の人びとの語りから」査読無、三尾稔編『南アジア地域における消費社会化と都市空間の変容に関する文化人類学的研究(科学研究費補助金〔基盤研究(A)〕研究成果報告書)』(国立民族学博物館) pp. 143-158
- ⑤ 杉本良男. 2010, 「宗教センターの都市性—南インド・モデル試論—」査読無、三尾稔編『南アジア地域における消費社会化と都市空間の変容に関する文化人類学的研究(科学研究費補助金〔基盤研究(A)〕研究成果報告書)』(国立民族学博物館) pp. 1-23
- ⑥ 太田信宏. 2010, 「王都ヴィジヤナガラは誰が建てたのか—ヴィディヤーランヤ伝承とその歴史的背景」査読無、三尾稔編『南アジア地域における消費社会化と都市空間の変容に関する文化人類学的研究(科学研究費補助金〔基盤研究(A)〕研究成果報告書)』(国立民族学博物館) pp. 24-43
- ⑦ 中島岳志. 2010, 「チャンディーガルー—差するネルーとコルビジェ」査読無、三尾稔編『南アジア地域における消費社会化と都市空間の変容に関する文化人類学的研究(科学研究費補助金〔基盤研究(A)〕研究成果報告書)』(国立民族学博物館) pp. 44-54
- ⑧ 三尾 稔. 2010, 「『追憶』のコミュニティー—ラージャスターン州ウダイプルにおける憑霊カルトとローカリティの再構築」査読無、三尾稔編『南アジア地域における消費社会化と都市空間の変容に関する文化人類学的研究(科学研究費補助金〔基盤研究(A)〕研究成果報告書)』(国立民族学博物館) pp. 232-258
- ⑨ 松尾瑞穂. 2010, 「インドにおける都市中間層の宗教実践—ナラヤン・ナーグバリ儀礼と『家族の問題』」査読無、三尾稔編『南アジア地域における消費社会化と都市空間の変容に関する文化人類学的研究(科学研究費補助金〔基盤研究(A)〕研究成果報告書)』(国立民族学博物館) pp. 212-231
- ⑩ 中谷哲也. 2010, 「インド・デリーにおける近隣関係の構築と都市化・再開発—ベンガル人避難民コロニーを事例として」査読無、三尾稔編『南アジア地域における消費社会化と都市空間の変容に関する文化人類学的研究(科学研究費補助金〔基盤研究(A)〕研究成果報告書)』(国立民族学博物館) pp. 159-195
- ⑪ Minoru, Mio. 2009, “Young Men’s Public Activities and Hindu Nationalism: Naviyuvak Mandals and the Sangh Parivar in a Western Indian Town.” 査読無 in David Gellner(ed.) *Ethnic Activism and Civil Society in South Asia.* (Sage Publication) pp. 27-56.
- ⑫ Yoshio, Sugimoto. 2008, “‘Boys Be Ambitious’: Popular Theatre, Popular Cinema and Tamil Nationalism.” 査読有 in Terada Yoshitaka(ed.) *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan.* pp. 229-240.

[学会発表] (計 27 件)

- ① 三尾 稔 2009 年 12 月 5 日 『宗教：運動と変容』に関する予備的考察－ヒンドゥーを事例として－ 人間文化研究機構プログラム「現代インド地域研究」2009 年全体集会 (京都府、京都大学)
- ② 杉本良男 2009 年 12 月 5 日 「環流する文化とナショナリズム」人間文化研究機構プログラム「現代インド地域研究」2009 年全体集会 (京都府、京都大学)
- ③ Aya, Ikegame. 2009 年 4 月 1 日 ” Why Do Backward Castes Need Their Own Gurus? the Social and Political Significance of New Caste-based Monasteries in Karnataka.” The Annual Conference of British Association for South Asian Studies, a Panel on ‘Guru Culture: Rethinking Renunciation and Religious Leadership in South Asia. (University of Edinburgh, Edinburgh, UK)
- ④ Izumi, Morimoto. 2008 年 8 月 14 日 “The Impact of Global Tourism on the Gandharbas in Nepal.” The 31st International Geographic Conference. (The Karam Palace, Tunis, Tunisia)
- ⑤ 小牧幸代 2008 年 5 月 31 日 「拡散するイスラームの聖遺物と聖地～あるいは分有された預言者の身体～」日本文化人類学会第 42 回研究大会 (京都府、京都大学)
- ⑥ 外川昌彦 2007 年 6 月 2 日 「<表象>と<代表>のはざま－バングラデシュのある聖者廟をめぐる『開発』と『人類学』」日本文化人類学会第 41 回研究大会 (愛知県、名古屋大学)

[図書] (計 5 件)

- ① 三尾 稔 2010 『南アジア地域における消費社会化と都市空間の変容に関する文化人類学的研究 (科学研究費補助金 [基盤研究 (A)] 研究成果報告書)』(国立民族学博物館) 総頁数 286 頁。
- ② 三尾 稔・金谷美和・中谷純江 2008 『インド刺繍布のきらめき－バシン・コレクションに見る手仕事の世界』(昭和堂) 総頁数 125 頁。

[その他]

○ホームページ

国立民族学博物館ホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/research/sr/18251016.html>

○新聞掲載情報

- ① 三尾 稔・杉本良男・寺田吉孝 「みんぱく公開講演会 激動するインド世界－人々の暮らしから読みとく」・毎日新聞 (朝刊)・2009 年 4 月 3 日 (金)
 - ② 三尾 稔 「“万華鏡”の魅力 講演会「激動するインド世界」を前に」・毎日新聞 (夕刊)・2009 年 2 月 13 日 (金)
- その他
<みんぱく学術講演会>
- ① 三尾 稔 2009 年 3 月 19 日 「インド西部の暮らしと信仰－包括と分割のはざまで」みんぱく公開講演会 『激動するインド世界－人々の暮らしから読みとく』(大阪府・大阪市、オーバルホール)
 - ② 杉本良男 2009 年 3 月 19 日 「環流する<インド>－海外在住インド人のインパクト」みんぱく公開講演会 『激動するインド世界－人々の暮らしから読みとく』(大阪府・大阪市、オーバルホール)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三尾 稔 (MIO MINORU)

国立民族学博物館・研究戦略センター・准教授

研究者番号：50242029

(2) 研究分担者

杉本 良男 (SUGIMOTO YOSHIO)

国立民族学博物館・民族社会研究部・教授

研究者番号：60148294

(3) 連携研究者

押川 文子 (OSHIKAWA FUMIKO)

京都大学・地域研究統合情報センター・教授

研究者番号：30280605

高田 峰夫 (TAKADA MINEO)

広島修道大学・人文学部・教授

研究者番号：80258277

八木 祐子 (YAGI YUKO)

宮城学院女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：70212272

井坂 理穂 (ISAKA RIHO)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：70272490

太田 信宏 (OTA NOBUHIRO)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授
研究者番号：40345319

外川 昌彦 (TOGAWA MASAHIKO)
広島大学・大学院国際協力研究科・准教授
研究者番号：70325207

森本 泉 (MORIMOTO IZUMI)
明治学院大学・国際学部・准教授
研究者番号：20339576

小牧 幸代 (KOMAKI SACHIYO)
高崎経済大学・地域政策学部・准教授
研究者番号：20303901

中島 岳志 (NAKAJIMA TAKESHI)
北海道大学・大学院公共政策学連携研究部・准教授
研究者番号：40447044

中谷 哲弥 (NAKATANI TETSUYA)
奈良県立大学・地域創造学部・准教授
研究者番号：50285384

(4) 研究協力者

池亀 彩 (IKEGAME AYA)
エジンバラ大学・南アジア研究センター・研究員

小磯 千尋 (KOISO CHIHIRO)
兵庫医療大学・リハビリテーション学部・兼任講師

金谷 美和 (KANETANI MIWA)
国立民族学博物館・外来研究員
研究者番号：90423037

中谷 純江 (NAKATANI SUMIE)
鹿児島大学・国際戦略本部・准教授
研究者番号：30530034

松尾 瑞穂 (MATSUO MIZUHO)
国立民族学博物館・外来研究員
研究者番号：80583608